

新版日本文学史近代II

久松潜一
五味智英
池田亀鑑
秋山虔
市古貞次
麻生磯次
吉田精一

至文堂刊

新版日本文学史 7 近代Ⅱ

昭和48年6月5日発行

ひきまつ せんいち
久松潜一編

発行所 至文堂

東京都新宿区弘方町27

東京(260) 2211(代)

発行者 佐藤泰三

印刷 株式会社文栄社 製本 大口製本印刷

序

文学史の研究は、文学研究における到達点であり、これによって全体と有機的に統一づけることができる。日本文学の研究においても、明治以後はそれ以前の注釈を中心としたと異なつて、文学史研究が中心的位置を占めてきたが、なお今後にまつところが多い。私自らも日本文学史の研究の一つの課題として多年考察を続けており、これに関する一、二の述作をまとめたことがあるが、個人の研究には限界がある。ことに規模の大きい文学史においては、それぞれの時代の専門分野にわかれてくるので、共同的に扱うことが必要となるのである。

こういう考えのもとに同学とともに先年規模の大きい日本文学史を企画し、各時代文学史をそれぞれ専門とされている方々にこうて執筆していただいた。全体を一つの史観によって貫くというよりも、それぞれの分野における最も正確な叙述によって文学史の基礎をしっかりと立てることが目標であつた。そして、多数の人が書いた場合に、相互に有機的な連絡がなく統一のなくなることにないために、私のほかに五味智英・池田亀鑑・市古貞次・麻生磯次・吉田精一の五氏がそれぞれ専門とする時代を分担されて、執筆者とも十分打ち合わせをし、各項が講座風な配列と叙述に終らないように有機的な調整をした。そして、執筆者の深い協力と編集の五氏の献身的な努力とによって、立派な内容の上に全体に統一のとれた文学史となることができたのである。

それから一〇年が過ぎた時、顧みると文学史上の新資料・新見解の現れた点も多く、学界の水準を示すためには増補訂正をなすべき点も生じてきたので、執筆された方々に再びこうて増補訂正を行い、新しく発表された参考文献をも加えた。近代編ではその後の文学的事象を書き加えていただき、年表も数年間の記事を補った。したがって索引を

新たに作成し、口絵写真なども新しくした。ただこの間に、執筆者のうちで池田亀鑑・風巻景次郎・西下経一・秋本吉郎・田辺幸雄・吉原敏雄・佐佐木治綱・杉浦正一郎・宇佐美喜三八・片岡良一氏らが世を去られた。そのために中古編の編集に秋山虔氏を委嘱するとともに、各項目についてもそれぞれ新しく執筆者を依頼して増補訂正を行った。かくして面目を一新した日本文学史六巻が完成したのは昭和三十九年のころであった。

それからさらに、五、六年は過ぎたが、増補訂正版では、増補した部が本文とは別々になっているので、使用の上でも体裁の上でも不便ことが少なくなかった。そこでこのたびは執筆者にこうて増補の部分をも本文に組み入れ、また全面的に書きかえたりして、新版として世に送ることになった。近世・近代はもともと量も多かった上に、近代では書き加える部分も多く、一層量も大きくなったので二冊にわけることにした。また総説年表編の年表も書き加えられ、量も多くなるので、年表編と総説編を別々にすることにした。

このたびの新版では、参考文献をまとめて後に加えることにした。その他、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。ただ引用文はもとのままである。

日本文学史の研究は、今後とも進展してやまない。本書にしても、文学史の一つの段階を表すものではあろうが、これによって日本文学史研究の現在における大きな礎石としての役割を果すことはできるであろう。

終りに、この日本文学史のためにそれぞれすぐれた研究成果にもとづいて執筆され、再三にわたって増補もしくは書き改めて下さった方々の協力を心から感謝する。ただ増補訂正版からこのたびの新訂版に至る間に窪田敏夫・田崎治泰氏らが世を去られたためもあって新しく執筆を中西進・犬養廉・島田良二・福田秀一・長谷川強・恩田逸夫・片岡懋氏らに委嘱した。片桐顕智氏は書き改めを完成されたのちに世を去られた。この日本文学史の形成と発展にも、種々の世の移り変りが現れていることを今更に感ずるのである。

さらにまた、この文学史をよりよくするために不断に協力を惜しまれなかつた佐藤正叟氏も世を去られて、新たに佐藤泰三氏によってことが進められたことを付記して、感謝の意を表したい。

昭和四十六年四月

久松 潜 一

目次

大正・昭和の文学

第一章 小説・戯曲

一 耽美派

名称と史的区分(六二) — 環境と特質(六二) — 耽美派の先達(六三) — 小山内薫(六四) — スバル系の作家(六五) — 耽美派と京都(六六) — 浪漫派以外の耽美的傾向(六七) — 永井荷風(六八) — 谷崎潤一郎(六九) — 三田派の耽美精神(七〇) — 「三田文学」(七一) — 佐藤春夫(七二) — 岡本かの子(七三) — 耽美主義の帰趨(七四)

二 白樺派の運動

雑誌(六四) — 白樺派(六五) — 美術運動との関係(六七) — 白樺派の思想(六八) — 文学の特質(六九) — その影響(七〇) — 武者小路実篤(七一) — 初期の作品(七二) — 戯曲(七三) — 「その妹」(七四) — 新しき村(七五) — 「幸福者」(七六) — その作風(七七) — 志賀直哉(七八) — その作風(七九) — 「城の崎にて」(八〇) — 「暗夜行路」(八一) — 長与善郎(八二) — 「項羽と劉邦」(八三) — 「竹沢先生と云ふ人」(八四) — 有島武郎(八五) — 「カインの末裔」と「或る女」(八六) — その作風(八七) — 「惜みなく愛は奪ふ」(八八) — 有島生馬(八九) — 里見淳(九〇) — 倉田百三(九一) — 犬養健(九二) — 白樺派の意義(九三)

三 自然主義運動の展開……………六一

秋声と白鳥(六六)―花袋と藤村(六六)―情話文学(六五)―第二の頂角(六五)
―自然主義作家の変貌(六七)―藤村(六七)―秋江・花袋・秋声(六九)―後
期自然主義(七〇)―吉田紘二郎(七二)―教養主義(六七)―正宗白鳥(六七)
―岩野泡鳴(七四)―私小説・心境小説の一般化(六七)―身辺雑記の流行
(六七)―私小説のリアリティ(六七)―東洋的超越主義(六八)

四 新思潮派とその周囲……………六八

新思潮派と新現実主義(六八)―「新思潮」の由来(六八)―第一次(六八)―
第二次(六八)―第三次(六九)―第四次と新思潮派の特質(六九)―新思潮派
と新劇運動(七〇)―第五次以後(七〇)―豊島与志雄と山本有三(七〇)―
芥川龍之介(七〇)―久米正雄(七〇)―菊池寛(七〇)―松岡譲と宗教文学
(七四)―周囲の新現実派の作家たち(七五)

五 早稲田派と後期自然主義……………六九

1 早稲田派……………六九

奇蹟派(六九)―広津和郎(七〇)―葛西善蔵(七〇)―宇野浩二(七二)―嘉
村磯多(七二)―牧野信一(七三)

2 自然主義作家の晩年……………七三

民衆芸術の影響(七三)―通俗文学への接近(七五)―正宗白鳥(七七)―徳
田秋声(七〇)―「縮図」(七〇)―白鳥(七〇)―「根無し草」(七三)―島崎
藤村(七三)―近代叙事情文学(七五)―その後の広津と宇野(七六)

六 プロレタリア文学……………七六

1 序 説……………七六

プロレタリア文学の歴史（七三）―政治小説（七九）―社会小説（七〇）―社会主義小説（七〇）

2 プロレタリア文学運動の経過……………七三

種蒔く人（七三）―文芸戦線生れる（七四）―文芸戦線の分裂（七七）―文芸戦線の再分裂（七九）―ナップの組織（七四）―蔵原惟人の指導理論（七四）―ナップの作家（七四）―文芸戦線の作家（七五）―ナップ系の作者（七七）―小林多喜二の作品（七九）―プロレタリア文学団体消滅後の状態（七二）

七 芸 術 派……………七五

概観（七五）

1 新 感 覚 派……………七四

成立と特色（七四）―横光利一（七五）―川端康成（七五）―中河与一（七五）―岸田国士（七五）―左翼化した作家たち（七六）―その他の作家たち（七六）―新感覚派のゆくえ（七六）

2 新 興 芸 術 派……………七三

構成要素と特色（七三）―龍胆寺雄（七三）

3 新 興 芸 術 派 周 辺 の 文 学……………七六

井伏鱒二（七六）―林芙美子（七六）―芹沢光治良（七六）―深田久弥（七六）―梶井基次郎（七六）

4 新 社 会 派……………七九

おもな作品（七〇）

5 新 心 理 主 義……………七〇

第二章 評

論

- 新心理主義文学の系譜 (七〇) — 伊藤整 (七三) — 堀辰雄 (七三) — 新感覺派からの転換としての心理小説 (七四) — 新心理主義文学の分流 (七五) 七六
- 6 行動主義 七六
- 舟橋聖一 (七七) 七六

- 7 伝統文学の復興 七六
- 既成大家の復活 (七七) 七六

- 一大正時代 七六

大正時期文芸評論思潮 (七〇) — 遊蕩文学撲滅論 (七二) — 理想主義の思想 (七三) — 左右田喜一郎と阿部次郎 (七三) — 生田長江と広津和郎 (七五) — 伝統主義論議 (七六) — 民衆芸術論 (七七) — 民衆より階級へ (七八) — 階級芸術論 (七八) — 描写論 (七九) — 文芸作品の内容価値論争 (八〇) — 散文精神論争 (八二) — 私小説論 (八二) — 谷崎・芥川の論戦 (八三) — 作家論と作品論 (八四)

- 二昭和時代 七九

- 1 プロレタリア文学評論の趨勢 七九

- 前駆的諸潮流 (七八) — 「文芸戦線」の発刊 (七八) — 青野季吉の「『調べた』芸術」と「目的意識」 (七八) — 「文芸戦線」と「戦旗」の対立 (八九) — 蔵原惟人の理論 (八九) — 「芸術の大衆化論」をめぐる論争 (九〇) — 政治的価値と芸術的価値の問題 (九二) — 社会主義リアリズムの理論 (九三) 八〇
- 2 新感覺派文学評論の趨勢 八〇

「文芸時代」の創刊 (九三) — 新しい文学様式追求の胎動 (九四) — 新感覺派

第三章

詩・短歌・俳句

一 詩

- | | | | |
|----------------------|----------------------------|--------------------------|----------------------------|
| 文学の理論 (八〇) | — 新感覚派の欠陥とアンチ新感覚派の台頭 (八〇七) | — 内容と形式の問題をめぐる論争 (八二〇) | 八二二 |
| 新興芸術派の結成と解体 | | | 八二三 |
| 十三人倶楽部の結成 (八三三) | — 代表的マニフェスト「芸術派宣言」 (八三三) | — 新興芸術派解体のきざし (八三四) | — 新心理主義文学と主知的文学論 (八五五) |
| マルクス主義文学理論の退潮と文芸復興 | | | 八五六 |
| 評論家小林秀雄の登場 (八二六) | — 「文学界」の創刊 (八二七) | — 「私小説論」と小林・正宗論争 (八二八) | — いわゆる「大家」による文芸復興の気運 (八二九) |
| 行動主義文学の台頭 (八二九) | — 横光の「純粹小説論」の提唱 (八三三) | | |
| 5 事変から戦時にいたる文化統制下の文学 | | | 八三三 |
| 事変下の抵抗精神 (八三三) | — 転向文学の論議 (八三四) | — 日本浪漫派の活躍 (八三四) | |
| — 日本文芸学派の台頭 (八三六) | — 国民文学論の提唱 (八三六) | — 戦時体制下の文化、文学理論の趨勢 (八三七) | — 近代の超克 (八三九) |
| 一 詩 | | | 八三〇 |
| 1 大正時代 | | | 八三〇 |
| 口語自由詩の発生 (八三〇) | — 民衆詩派 (八三三) | — 感情詩派 (八三六) | — 人道詩派 (八四〇) |
| — 芸術詩派 (八四四) | — アヴァンギャルド詩運動 (八四九) | | |
| 2 昭和時代 | | | 八五五 |
| 「詩と詩論」の転開と分裂 (八五五) | — プロレタリア詩の高揚 (八六三) | — 抵抗の詩人 (八六五) | — 「四季」の詩人群 (八六九) |
| — 「歷程」の詩人群 (八七五) | — その他 | | |

二 短

の詩人（六八二）——現代詩研究の展望（六八二）

1 大 正 期

（一）通 観 八八三

歌壇の成立（六八三）——時代区分（六八四）——第一期（六八四）——第二期（六八五）——第三期（六八六）

（二）『スバル』系の歌人 八九〇

北原白秋（六九〇）——吉井勇（六九一）

（三）『アララギ』の歌人 八九一

島木赤彦（六九一）——斎藤茂吉（六九二）——中村憲吉（六九四）——古泉千樞（六九五）——

石原純（六九五）——釈詔空（六九六）

（四）『心の花』の歌人 八九六

佐佐木信綱（六九六）——石樽千亦（六九六）——木下利玄（六九七）——川田順（六九七）——

柳原白蓮（六九七）——九条武子（六九八）

（五）柴舟系の歌人 八九八

尾上柴舟（六九八）——岩谷莫哀（六九九）——石井直三郎（六九九）——若山牧水（七〇〇）——

前田夕暮（七〇〇）

（六）空穂系の歌人 九〇一

窪田空穂（九〇一）——松村英一（九〇二）——半田良平（九〇二）

（七）『潮音』の歌人 九〇二

太田水穂（九〇三）——四賀光子（九〇三）

（八）蕙園系の歌人 九〇三

金子薫園 (九三三) — 吉植庄亮 (九〇四)

(4) その他の歌人 九〇四

尾山篤二郎 (九〇四) — 橋田東声 (九〇五) — 土岐善麿 (九〇五)

(5) 口語派の歌人 九〇六

青山霞村 (九〇六) — 西出朝風 (九〇六) — 鳴海要吉 (九〇七) — 西村陽吉 (九〇七)

昭和 九〇八

(一) 前期 通 観 九〇八

昭和短歌史の出發 (九〇八) — 時代区分 (九〇九) — 第一期 (九〇九) — 定型歌壇 (九一〇)

一口語歌壇 (九一二) — 第二期 (九一三) — 多磨の創刊とその意義 (九一三) — その

他の動き (九一五) — 自由律の定型復帰 (九一五) — 第三期 (九一六) — 文学報国会

(九一七) — 新風十人 (九一七) — 第四期 (九一八) — 空白の歌壇 (九二〇)

(二) 定型 歌 壇 九一六

停滞した歌人たち (九二一) — 発展した歌人たち (九二二) — 土屋文明 (九二三) —

岡麓 (九二三) — 土田耕平 (九二三) — 結城哀草果 (九二三) — 杉浦翠子 (九二三) — 今

井邦子 (九三三) — 橋本徳寿 (九三三) — 斎藤瀏 (九三四) — 五島茂 (九三四) — 山下陸

奥 (九三四) — 前川佐美雄 (九三三) — 明石海人 (九三五) — 松田常憲 (九三五) — 小泉

蓼三 (九三六) — 細井魚袋 (九三六) — 岡野直七郎 (九三六) — 岡山巖 (九三七) — 若山

喜志子 (九三七) — 菊池知勇 (九三七) — 村野次郎 (九三六) — 植松寿樹 (九三六) — 対

馬完治 (九三六) — 宇都野研 (九三六) — 白井大翼 (九三六) — その他の歌人 (九三六)

(三) 自由律・無産派の歌人 九三〇

石原純 (九三〇) — 西村陽吉 (九三〇) — 清水信 (九三〇) — 児玉敬一 (九三二) — 渡辺

順三 (九三二)

三 俳 句

1 大 正 期

(一) 自由律俳句運動

碧梧桐と近代精神 (九五三) — 碧梧桐の限界 (九五四) — 井泉水と自由律 (九五五) —
 印象の律 (五九六) — 時代的背景 (五九七) — 中塚一碧楼 (五九七) — 自由律の傾斜
 (五九八) — 尾崎放哉 (五九八) — 「層雲」の人々 (五九九) — 「海紅」の人々 (五九九)
 (二) 定型俳句の再出発

高浜虚子 (九五〇) — 「ホトトギス」の俳壇復帰 (九五二) — 自由律への防壁 (九五二)

— 伝統の尊重 (九五二) — 「ホトトギス」雑誌 (九五二) — 「ホトトギス」の二傾向
 (九五三) — 主観的傾向 (九五三) — 客観俳句 (九五三) — 村上鬼城 (九五三) — 渡辺水巴
 (九五三) — 原石鼎 (九五三) — 前田普羅 (九五三) — 飯田蛇笏 (九五三) — 客観写生 (九五三)
 — 客観写生の大衆性 (九五三) — 客観俳句の限界 (九五三) — 臼田重浪 (九五三)

2 昭 和 期

(一) プロレタリア俳句運動

プロレタリア俳句の基盤 (九五三) — プロレタリア俳句の発生 (九五三) — プロレ
 タリア俳句の作家 (九五三) — プロレタリア俳句の意義 (九五三) — プロレタリア
 俳句のその後と現状 (九五三)

(二) 新興俳句の動向

定型俳句陣の近代化 (九五三) — 花鳥諷詠の性格 (九五三) — 草の芽俳句 (九五三) —
 水原秋桜子 (九五三) — 山口誓子 (九五三) — 新興俳句運動の展開と主要作家 (九五三)
 — 新興俳句の特色 (九五三) — 連作と無季俳句 (九五三) — 新興俳句の功罪 (九五三)
 — 新興俳句陣営の分裂 (九五三) — 芸術派と生活派 (九五三) — いわゆる京大俳句
 事件 (九五三)

九五三

九五三

九五三

九五〇

九五〇

九五〇

九五三

（目）人生俳句の出版……………九六〇

新興俳句批判（九六〇）——人生俳句の内面性（九六二）——中村草田男（九六三）——加藤楸邨（九六三）——石田波郷（九六四）——大野林火（九六四）

第四章 児童文学……………九六六

一時代区分……………九六六

明治期（九六六）——大正期（九六七）——昭和期（九六七）

二明治期……………九六六

前期（九六六）——少年雑誌の発行（九六六）——翻訳翻案小説（九六六）——中期（九六七）——博文館と少年物（九六七）——こがね丸（九六七）——巖谷小波（九六七）——小波の児童文学観（九六八）——少年文学の作家たち（九六八）——小公子と十五少年（九六八）——冒險小説（九六八）——小川未明（九六八）——赤い船（九六八）

三大正期……………九六〇

前期（九六〇）——中期（九六〇）——赤い鳥（九六二）——鈴木三重吉（九六二）——秋田雨雀（九六二）——楠山正雄（九六三）——浜田広介（九六四）——児童劇（九六五）——後期（九六五）

四昭和期……………九六六

第一期（九六六）——プロレタリア児童文学運動（九六七）——芸術派の児童雑誌（九六八）——坪田譲治（九六八）——宮沢賢治（九六九）——第二期（九六九）

五戦後期……………九七〇

時代区分（九七〇）——第一期（九七〇）——石井桃子と竹山道雄（九七五）——第二期（九七六）

戦後の文学

—「少年文学」宣言（一九三七）—第三期（一九三八）—長編中心の多彩な活動（一九九八）

1001

第一章 昭和十年前後より終戦まで

1002

一 昭和十年代前半の文学

1003

昭和文学の転換——文芸復興の気運（1003）——戦争文学と農民文学（1009）
——文化統制と国策文学（1011）——芸術的抵抗——私小説・歴史小説・風俗小説（1013）

二 太平洋戦争下の文学

1014

超国家主義イデオロギーの台頭——その文学的影響（1015）——「近代の超克」（1017）——戦争末期の状況（1019）

第二章 戦後の小説・戯曲

1020

文学の再出発（1020）——創作活動の再開（1025）——昭和作家の動向（1026）
——近代小説理念の動揺（1033）——私小説について（1036）——民主主義文学の
出発（1037）——主要な作品（1039）——民主主義文学運動の分裂（1044）——「近
代文学」と戦後派の形成（1045）——戦後文学の特質（1047）——「死霊」（1048）
——野間宏（1049）——椎名麟三（1050）——梅崎春生（1051）——武田泰淳（1052）
——中村真一郎（1053）——マチネ・ポエティク（1054）——第二次戦後派（1054）
——三島由紀夫（1056）——大岡昇平（1057）——堀田善衛（1057）——島尾敏雄
（1058）——原民喜・安部公房（1059）——戦後文学運動の解体（1059）——戦後
派以後（1060）——第三の新人（1062）——小島信夫（1062）——安岡章太郎

第三章 評

論

1076

一 民主化の時期と文学主体

1076

荒廃からの精神志向 (1076) — 新日本文学会の結成 (1076) — 近代文学派の
出发点 (1076) — 「政治と文学」論争 (1076) — 論争の周辺と評壇諸傾向
(1076) — 新戯作派の主張 (1076)

二 占領終結と文学基盤の検討

1076

平和革命論の失墜 (1076) — 国民文学論の提起事情 (1076) — 近代文学検討の
方法深化 (1076) — 民族伝統の照明の試み (1076) — 評論における二元論
(1076)

三 文学理念変貌の動向

1075

戦後サイクルの終焉 (1075) — 「民主主義文学運動」の再分裂 (1075) — 解
体する戦後文学派 (1075) — 破産を宣告する新批評派 (1075) — 「政治と文
学」論争の帰趨 (1075) — 伝統再発見と言語認識 (1100) — 家庭崩壊と性の
凝視 (1101) — 錯綜する文学精神 (1101)

第四章 詩

1104